



サイバースペースの誕生

S Fが好きだという人は結構いるに違いない。そのS Fの歴史について述べた面白い文章を紹介しよう。

＊

サイバースペースとは、コンピュータをつなぐネットワークを、ひとつの空間（スペース）として捉える比喩的な表現である。いまでは古くさく響く言葉だが、一時はかなり広く普及していた。「電腦空間」と訳されたこともある。

この言葉が広く知られるようになったきっかけは、ウィリアムス・ギブスンが一九八四年に出版した小説『ニューロマンサー』だと言われている。ギブソンはこの作品で、ネットワークへのアクセスを「没入」（ジャック・イン）という言葉で形容し、そのことによって登場人物の意識が物理的身体から電子的身体へ切り替わるかのように描写した。つまりは彼は、近未来の情報ネットワークを、目のまへの物理的な現実とは異なるかたちで自立して存在する、電子的な並行世界であるかのように描いたのである。その並行世界が「サイバースペース」と呼ばれる。いまならばVR（仮想現実）の概念に近いだろう。

サイバースペースや「没入」の経験は、あくまでも文学における表現である。いまぼくたちは日常的にコンピュータやネットワークを使っているが、その経験は現実の身体にはなんの影響も与えない。ネットワークに接続してSNSの投稿を読むことと、オフラインで本を読むことは、同じ「読む」という点ではまったく同じだ。実際ギブソンは、『ニューロマンサー』の執筆当時、現実のコンピュータやネットワークにほとんど無知だったと言われている。サイバースペースは完全に彼の想像の産物なのだ。

にもかかわらず、この言葉は多くの読者を惹きつけた。彼以降、サイバースペースを描く多くの小説

や映画が似たイメージを採用していく。たとえば日本では、士郎正宗のコミックを押井守が映画化した『GHOST IN THE SHELL 攻殻機動隊』（一九九五年）が有名である。『ニューロマンサー』が開いたその潮流は、文化史では「サイバーパンク」と呼ばれている。そしてその影響力は、虚構だけでなく、現実の情報社会論をも侵食していくことになる。

S Fとはなにか。ダルコ・スーヴィンは、S Fを「異化」と「認識」を同時に実現する文学だと定義している。ひらたく言えば、S Fとは、ぼくたちが生きる「いまここ」の現実とは異なる別の現実を、論理的な仮定に基づき導入し描写する文学のことである。この定義でのS Fは一六世紀のトマス・モアにまで遡るが、二〇世紀にはそれがひとつの文学ジャンルにまで成長した。ジャンルS Fは、一般には一九二〇年代に誕生したと見なされている。ヒューゴー・ガーンズバックによる初のS F専門誌『アメーzing・ストーリーズ』が、一九二六年に創刊されたからだ。

ジャンルS Fにおいて、スーヴィンのいう「異化」のための世界は、当初は宇宙や未来として設定されていた。クラーク、アシモフ、ハインラインといった黄金期のS F作家たちが、宇宙と未来から続々と現れる。けれども、一九七〇年代に入ると、その舞台設定そのものがむずかしくなってくる。宇宙や未来が、それだけでは異化の想像力を刺激する舞台でなくなり始めたからである。たとえば一九六九年にはアポロ一号が月に着陸している。しかし、現実には人類が月に行ったからといってなにが変わったわけでもないし、みなそれが知ってしまった。それが一九七〇年代という時代である。そもそも一九七〇年代は、より広い文脈でも、近代主義が限界を迎えたとされる時代である。（次号に続く）